

メラネシアにおけるヤム芋栽培

石井, 眞夫
佐賀大学教養部

<https://doi.org/10.15017/2235382>

出版情報 : 九州人類学会報. 16, pp.17-25, 1988-07-10. Kyushu Anthropological Association
バージョン :
権利関係 :

メラネシアにおけるヤム芋栽培

石 井 眞 夫

1. はじめに

ヤム芋はタロ芋、バナナ、サゴ椰子、さつま芋、パンの実などとともに、トンガ、サモア以西の南太平洋地域においては主食物として、根茎栽培農耕の中心をなしている。ヤム芋は食料として重要なことは言うまでもないが、そのこと以上に、ヤム芋はメラネシアを中心とする南太平洋の文化の中では、様々な社会的意味をもつという点できわめて重要な位置を占めている。ヤム芋の栽培量が少なく、したがって、食料としては他の栽培植物がより重要であるような地域でも、ヤム芋はしばしば文化的に高い価値を与えられている。この事実は、メラネシア民族誌の中ではしばしば記述されているものの、ヤム芋栽培のもつ多様な側面についての比較検討はほとんどなされておらず、その重要性については等閑視されてきたとさえ言える。ここでは、メラネシアを中心とした南太平洋地域において、ヤム芋栽培がどのようなものとして表象され、どのような性格をもっているかを比較することによって、その意義と多様性について民族誌的に綴ってみることにしたい。

2. 南太平洋におけるヤム芋の栽培

南太平洋地域で食用とされているヤム芋は、すべてディオスコレア種 (*Dioscorea* spp.) に分類され、パローによるとそれは次の6種、すなわち、*D. Bulbifera*, *D. Esculenta*, *D. Pentaphylla*, *D. Hispida*, *D. Nummularia* であるという。しかしながら、栽培種として重要なものは、これらのうちで、*Dioscorea Esculenta* 種 (ハリイモまたはトゲイモ) と *Dioscorea Alata* 種 (ダイジョ) の二つに事実上限られる。これ以外のものは、時に栽培されることはあるものの、ほとんどが野生のもの採集利用である。また、*Dioscorea Bulbifera* 種 (カシューイモ) と *Dioscorea Hispida* 種 (ミツパドコロ) のふたつはディオスコリン (*Dioscorine*) というアルカロイドを含み、有毒であるため食用には水に晒すなどしてアクを抜く必要がある。このふたつは時には矢毒として利用されることもあるという (Barrau 1948: 43-45)。栽培種として重要な二つのヤム芋の外観は対照的である。ダイジョ (*Dioscorea Alata*) は細長く、表面がなめらかなのに対して、ハリイモ (*Dioscorea Esculenta*) は比較的小さく塊状で表面は小さなヒゲ根でおおわれている。ダイジョは食用のために栽培されるというより、儀礼の中で重視されるため丹精を込めて丁寧に栽培される。丹精込めた栽培に成功した場合には、時に3メートルを越える長大なヤム芋に成長する。この長大なヤム芋は儀礼に際して展示され、その大きさを競うことがある。このダイジョの栽培、展示競争は、西イリアンからトンガ、サモアに至る南太平洋の広い範囲で見られる。

16世紀に他の作物が導入されるまで、ヤム芋はタロ芋、サゴ椰子と共にメラネシア地域の主たる澱粉源であった。ヤム芋とその栽培は、こうした中でいくつかの点で、他の作物とその栽培とは異なる特徴をもっている。まず、これらの作物はそれぞれ生育、栽培に適した環境が異なり、タロ芋が熱帯性の内陸部湿地を好み①、またサゴ椰子が河川や海岸部近くの低湿地を好むのに対して、ヤ

ム芋は水はけのよい、乾いた山地斜面を好んで栽培される。島嶼部のメラネシアでは海岸に面した斜面がその栽培に利用されるのが一般的である。メラネシア地域の気候は、南と北では地域によって多少の違いはあるものの、およそ11月から4月にかけての熱帯モンスーンが卓越する、暑く湿潤な雨季と、おおよそ5月から10月にかけての南東の貿易風が卓越する、比較的乾いた乾季に分けられる。しかしながら、風と降雨との関係は単純ではなく、南東貿易風は南部メラネシアでは乾いていても、北上するにしたがい湿気を増してゆくため、北部メラネシアでは風上側に当たる南東側山麓斜面ではかえってこの季節に年間の最大雨量を記録することもまれではない(Brookfield, H. C. & Hart, D. 1971:6-18)。栽培に季節性がなく、年間を通して植え付けや収穫が行われ、生育期間も品種によって6カ月から24カ月と幅の大きいタロ芋や、収穫まで少なくとも7, 8年もの年月が必要なサゴ椰子と違い、ヤマ芋は植え付けも収穫も年に一度決められた季節に規則的に行われる。多くの地域で、ヤマ芋は雨季のはじめに植え付け、乾季のはじめに収穫する。したがって、ヤマ芋は暑く雨の多い季節に生育することになる。この事実は乾いた斜面がヤマ芋の栽培に適しているとされるのは、雨量の問題というよりも水はけの問題であることを予測させる②。

つぎに、ヤマ芋の栽培はきわめて人為的かつ人工的であるということである。半野生のサゴ椰子や植え付け収穫ともに比較的軽い労働で済むタロ芋の栽培に比べると、ヤマ芋の植え付けは重労働である上に細心の注意が必要とされ、植え付け後も行き届いた管理が必要とされる。このことは単に植物学的な意味ばかりではなく、宗教的な意味においてもである。それは、ヤマ芋はしばしば霊を持つとされており、ヤマ霊を宥め、その怒りを招かぬよう細かい注意が必要とされるのである。この特徴は特にダイジョ(D. Alata)の栽培においてよく表れる。すでに述べたように、ダイジョは入念な栽培によって3メートルにも及ぶ長大なヤマ芋に成長するが、栽培者はそのためには細心の注意をもって耕作を行い、また様々な禁忌に従わねばならない。

最後に、ヤマ芋は他の作物と異なり、相当期間の保存が可能で、品種によっては保存期間は6カ月以上にも及び、ヤマ芋が重視される社会ではヤマ芋保存のための倉が建てられている。

ヤマ芋とその栽培が持つこうした多様な特徴は相互に関連しあいながらヤマ芋栽培文化を作り上げている。それは単に生業形態という側面にのみとどまらず、親族関係、交換経済、宗教、宇宙観、生命観といった多岐な面にわたっている。次にこうしたヤマ芋栽培にかかわる多様な民族誌のいくつかの側面を見てみよう。

3. ヤマ芋栽培と暦

ヤマ芋栽培のもつ季節性は、ヤマ芋の栽培と生育が暦、とりわけ農耕暦と密接に結びついていることを暗示している。ヤマ芋の収穫、あるいは植え付けはしばしばその土地の一年の始まりを示している③。トロブリアンド諸島は、ヤマ芋の農耕暦にしたがった13カ月からなる太陰暦をもち、新年はミラマラ(Milamala)月によって始まる。ミラマラは三つの複合的な意味を持つ。第一はこの季節にトロブリアンド諸島をおとずれる海生の環形虫、第二はこの「月」の名称、そして第三はこの月に行われる祭宴の名称である。この環形虫は8月から9月ごろの満月の夜に現れると言われ、これを期してミラマラの祭りが開始される。トロブリアンドの主作物はタロ芋とヤマ芋だが、ヤマ芋はクヴィ(Kuvi)とタイトゥ(Taytu)の二種に分類されている。マリノウスキーは前者を「大きなヤ

ム芋 (Large Yam)」、後者を「小さなヤム芋 (Small Yam)」と呼び、食料としては小さなヤム芋タイトゥがはるかに重要であり、生産量も多いのに対して、大きなヤム芋クヴィは展示用として見栄えがよく、その長さを競うと記述している。このことからして、クヴィはダイジョ (D. Alta)、タイトゥはハリモ (D. Esculenta) であると考えられる④。ヤム芋の収穫はタロ芋ともども、ミラマラの始まるひと月前には終わっており、収穫されたヤム芋は畑で二週間、広場で二週間展示され、人々はこのヤム芋を自慢したり誉めそやしたりする。このような点からはミラマラは収穫祭であると言えるが、ミラマラはまた同時に祖霊の祭りでもあって、祖霊パロマはこの収穫期を知っていて死者の国トゥマから村へと帰って来る。祖霊パロマが展示された「生の収穫物」に不満を持つと翌年の収穫に悪い影響を及ぼすとされる (Malinowski 1935, 1981; cf Leach 1959) ⑤。

ニューギニア、セピク川中流域山地に住むアベラム (Abelam) 族の一年もヤム農耕暦に従っていると言える。9月ごろすばるが西の空に現れるとともにヤム芋の植え付けが開始され、これは12月頃まで続く。植え付け以後の作業は月の数を数えて割り当てられ、これは収穫とヤム芋の展示が終わるまで続けられる (Kaberry 1941:346) ⑥。ニュー・ベブリディーズ諸島中部のペンテコスト島南部、及びマレクラ島では12ないし13の名前を持つ「月」からなる太陰暦に従って農耕を行う (Deacon 1934:175 et passim; Muller 1975:216)。主作物はヤム芋とタロ芋であるが、食料としてはタロ芋がはるかに重要で、消費される食料の中でヤム芋の占める割合は5パーセント程度にすぎない (Barrau 1958:63)。それにもかかわらず、農耕暦はヤム芋の栽培サイクルに従っており、月の名前もヤム芋耕作にちなんだものが多い。ヤム芋は11月頃から植え付けが行われ、翌年の5月から7月頃にかけて収穫される⑦。ヤム芋の栽培は、とりわけ男性にとっては主要な関心事であって、割礼をはじめとした主要な儀礼の多くはこのヤム芋栽培と観念的に結びつけられ考えられている。ヤム芋の耕作は一年のサイクルを形づくる枠組みの役割を果たしており、それは生活のより所であると同時に、この地域の価値意識とも密接な結びつきを示している。

南ペンテコストのヤム農耕暦

太陽暦	月名	主な農作業
5月	Wilygomdaman	呪術師がヤムを試し掘りする
6月	Wilyloose	ヤムの本格的収穫の開始
7月	Wilytaori	ヤム収穫の最盛期
8月	Wilylohim	ヤムを屋内に保存出来る
9月	Wilybusinedam	ヤムの積み直し
10月	Wilygalgatan	ヤム耕作の準備
11月	Wilytungtunan	ヤム植え付け開始
12月	Wilykoran	ヤム植え付け終了
1月	Wilutoan	ヤム畑の雑草取り
2月	Ulbale	新しいタロ畑のための開墾
3月	Ulitchingtchingan	タロの植え付け、タロ畑で火をつけてはならない
4月	Wilymormoroban	タロ畑で火をつけてもよい

フィジーのラウ諸島では、灌漑水耕によるタロ芋とともにヤム芋が主作物として栽培されるが、特に長いヤム芋は展示し、その出来ばえを競うために入念に栽培される。ヤム芋の植え付けは8月頃から開始されるが、満月の頃に植え付けるのが生育にとって好ましいとされ、オリオンが西の空にあるときに成長すると考えられている。そして4月頃に収穫が始まるまで、ヤム芋が妖術によって破壊されないよう細心の注意が必要とされる(Hocart 1929:102-107)。

ティコピアは地理的にはメラネシアに近いとはいえ、文化的にはポリネシアに属している。よく知られているようにポリネシア文化の中ではヤム芋はさしたる重要性はない。そしてティコピアでも経済的にはタロ芋、パンの実が重要であって、食料としてはヤム芋は補助的な役割しか果たしていない。しかしながらティコピアの諸儀礼はヤム芋なくしては考えられないほどに、ヤム芋は宗教的、儀礼的に重視されている。ほとんど全ての年中行事がヤム芋にちなんで執り行われるばかりか、ヤム芋は神の身体を象徴する神聖な作物と考えられている(Firth 1967)。

このようにヤム芋は、その栽培の周期性ゆえに一年の生活サイクル、暦を作り上げる基準ともいえるような性格を与えられている。そればかりか、年の始めや終りを示す儀礼とも深く関わることを通じて神聖な性格をも付与されている。次にこうしたヤム芋のもつ象徴的な意味についても見てみよう。

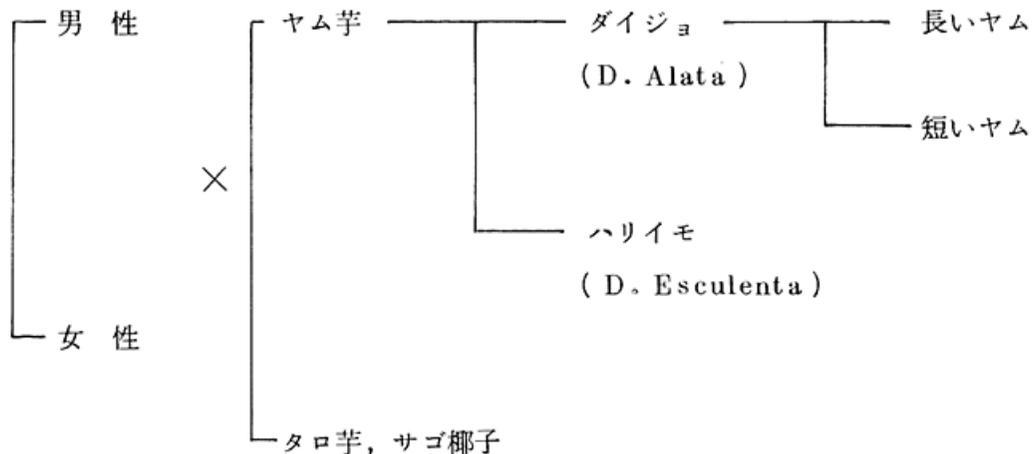
4. ヤム芋と性差

ニュー・ベブリディーズ諸島中部にあるペンテコスト島の南部でもヤム芋は神聖な作物として重視されている。主食物はタロ芋で、ヤム芋は食料としての重要性はほとんどないにもかかわらず、ヤム芋にはきわめて高い価値が与えられている。上述のように、ヤム芋は11月から12月頃にかけて植えられ、5月から7月頃にかけて収穫される。タロ芋の耕作が比較的軽い労働で済み、子供も含めての男女によって個人単位で行われ、また1年中いつでも植え付け収穫が行われるのに対して、ヤム芋の耕作は専ら男の仕事と考えられ、植え付け収穫ともに村中総がかりで一斉に行われる。男は2メートルにも及ぶ長大なヤム芋(D. Alata)を展示用に作るが、この作業は細心の注意が要求される重労働である。この作業では性別による分業がはっきりとしていて、女性は補助的な軽作業を除きほとんど手を出すことが出来ない。作業は男の身体、特に男根に関する卑猥な冗談を交わしながら行われる⑧。ヤム芋と男性との結び付きは、割礼儀礼にも現れる。割礼は5月の末頃、ヤム芋の収穫中に行われるが、割礼の隔離が明けると男性のみによるタルタブウェアンと呼ばれるヤム祭宴が行われ、ここで長大なヤム芋が展示されその出来ばえが自慢される⑨。ヤム芋は神聖で特別な作物であり、男の身体象徴であるとともに、男の誇りとその力を示しているのに対して、タロ芋は日常的でそれ故重要な作物ではあるが、より一般的な女性性を示しているともいう(Jolly 1981)。

ニューギニア、セピク川中流域のイラヒタ・アラベッシュではヤム芋は長いヤム芋と小さなヤム芋に分けられる。長いヤム芋とは特別に栽培されたダイジョ(D. Alata)をさし、小さいヤム芋とは普通のダイジョとハリイモ(D. Esculenta)とをさしている。ここでも長いヤム芋は男の誇りを表すとともに、男性の身体とりわけ男根を表していると言う(Tuzin 1972)。男は特別な注意を払いながら入念に長いヤム芋を栽培するが、このヤム芋はその男の力を示すものと考えられ、自慢の種となる。また、他人に長いヤム芋を見せつけることは男性の攻撃性の表現と考えられ、戦闘行為の代償でもある。男にとっての最大の屈辱とは敵対者に長いヤム芋を見せつけられることであると言う⑩。

そして、長いヤム芋は男のヤムと言われ、割礼が済み隔離が解けると、割礼を受けた少年達と同じ装飾をつけて展示される。ヤム芋は霊を持つと考えられているが、長いヤムの霊は父系出自集団の祖霊と交流していると考えられている。長いヤム芋の霊も人を守護する霊であるが、同時に恐ろしい力を持った霊であり、とりわけ女性と子供にとっては危険な霊である。反対に、女性器からの分泌物と月経血はヤム芋の生育にとって有害なためヤム畑への女性の接近は制限され、特に長いヤムの畑へは女性は立ち入ることが出来ない。

類例はセピク川流域の諸部族にしばしば見られるものである。クウォマ族はサゴ椰子澱粉を主食物にしており、ヤム芋 (*D. Esculenta*) は食料としては副次的な意味しか持たない。しかしながら、神秘的な力がヤム芋畑を通じて部族を脅かすと考えられており、その耕作には細心の注意が必要である。ヤム芋は女性の接近を嫌い、耕作にたずさわる男性も女性との接触を避けねばならない (Whiting & Reed 1938)。ここでは、サゴ椰子とヤム芋は様々な面で対照されている。ヤム芋は山地の畑で入念に栽培されるのに対して、サゴ椰子は低湿地で自然状態のものを利用する。サゴ椰子の採集と精製は男女ともに行うのに対して、ヤム芋の栽培は専ら男性の仕事である。山地の畑は常に人の手入れの行き届いた秩序だった場所であるのに対して、サゴ椰子の生える低湿地は人の手入れが行われない、道もないような無秩序地帯である。さらに、クウォマは山地は清浄で文明のある場所であるのに対して、低地は不浄で野生的な所であると考えられる。人の排泄物、ゴミ、とりわけ月経血などの不浄物は山地に捨てることは出来ないが、低地では自由に捨てる事が出来る。このように、ヤム芋はこれら社会の中では常に女性性と対立させられ、男性の身体、力、生命力、誇り、祖霊の力などに関連づけられている^⑩。それはあたかも、男性性と女性性との対立がヤム芋というメラネシアにおける主要な作物を格好の媒体として表現されているかのようである。



5. ヤム芋栽培の多義性

ヤム芋はその栽培の季節性によって、メラネシアの年中行事を作り上げるための基礎となっている。このことを別にしても、ヤム芋はメラネシアにおいては、他の農作物と比べて著しく象徴性に富んだ作物であると言えることが出来る。それは、メラネシア各地で報告されているヤム芋の展示競争にみられるように、ヤム芋は多くのメラネシア社会で男性の誇りを表す媒体とされていることや、さまざま

な伝承の中で男性性を象徴する役割を果たしていることから窺うことが出来る。この事実は、ヤマ芋の持つ象徴的な意味は単にその栽培の季節性にのみ基づくわけではないことも示している。トゥーzinはイラヒタ・アラベッシュにおいてヤマ芋が豊かな象徴性をもつのは、ヤマ芋のもついくつかの性格に由来しているとする。それは、第一にヤマ芋が重要な食料であることと、5カ月から7カ月という比較的短い期間に自己再生産する生き物であるということである。そして、第二により重要な点は、ヤマ芋、とりわけダイジョ (D. Alata) の栽培は重労働を要し、耕作者の技術や努力によってその結果が大きく左右されること、すなわち人の作為を受け入れる余地がきわめて大きいという点である。しかしながら、多くの農作物と同様に、ヤマ芋もまた植物であって偶然性や自然条件による耕作の失敗という不確実性をも併せてもち、このことがヤマ芋のもつ象徴力を高めているという (Tuzin 1972:233-235)。これらの点は、単にセピク地方のヤマ栽培のみがもつ特質ではなく、メラネシアのヤマ栽培に共通するものである。

確かに、食料としての重要性という点では、メラネシアではタロ芋やサゴ椰子もまた重要である。しかし、サゴ椰子はほとんどが自然物の採集利用であり、栽培される場合もその生産には10年近くもの年月が必要とされる。タロ芋は産量も多く食味のよい優れた食料であり、栽培に要する期間も短い、ヤマ芋とことなり保存が利かなくに耕作者の作為を受け入れる余地は少なく、またその栽培は子供でもできるほどに容易であり、耕作者の能力や努力を誇示するためには適していない。権威や誇りを示す象徴として他の農作物や家畜などが利用されないわけではない。しかしながら、他の農作物が権威や誇りの象徴とされる場合は、主に生産量や消費量といった量的な側面にのみその意義が限定され、ヤマ芋のようにその象徴的意味が形状にまで及ぶことはない。よく知られているように、メラネシアでは豚が交換財としても、また権威や権力の象徴としても重要視されている。豚もヤマ芋と同様にその飼育には多くの労力と努力が必要とされ、高い象徴的価値をもつ^⑫。しかし豚はヤマ芋のように身体性を象徴することはない。象徴としてのヤマ芋の特徴の一つは、身体特に男性の身体を表す点にある。男性の身体を表すことは、ひとつにはヤマ芋耕作が専ら男性の仕事とされていることにもよるが、何よりも巨大なダイジョの形状が男根と類比されていることにもよっていると考えられる^⑬。ヤマ芋の収穫祭やヤマ芋の展示と割礼儀礼、成人儀礼との結びつきもこのことと関連を持つと考えられる。そして、このことと密接に関連すると思われる、女性性との対立もまた豚にはない属性である。

ヤマ芋はまた霊的な存在でもある。ヤマ芋自体がヤマ霊をもつということばかりではなく、ヤマ芋耕作は祖霊とも深い関わりを見せている。トロブリアンドの事例のようにヤマ芋の収穫祭が祖霊の祭宴と結びつけられたり、セピク地方の例のようにヤマ芋の霊がしばしば祖霊と類比させられる。ヤマ芋を食べることはそのヤマの種芋を所有していた出自集団の祖霊を身体の中に取り込むことであり、出自集団の生命と霊を継承することをも意味する。イラヒタ・アラベッシュでは結婚に際して男女それぞれがヤマの種芋を持ち寄るが、この種芋から出来たヤマ芋は第一子の誕生までは決して混ぜてはならない。またクウォマでも収穫後のヤマは誰の畑でつくられたものかを区別しておく。ドブ島ではヤマ芋は人 ('tomot') であるとされ、その霊は夜畑を出て歩き回り、また耳を持ち人の呪文を聞いていると考えられている^⑭。種芋は母系出自集団ススの所有であって、夫婦であっても男女それぞれ別個に耕作しその収穫物は決して混ぜてはならない (Fortune 1963)。これらの事例は、出自集団間の関係がヤマ芋耕作の中に反映されていることを示す例である。

ヤム芋の霊は出自集団の祖霊と同様に人々に生命を与え、その豊饒を司る力を持つ。それと同時に、あるいはそうした力を持つがゆえにその霊は強力で危険な存在である。ヤム芋の収穫は一年で最も力と活気に満ちた季節である。それはまた霊力に満ちた季節でもあり、男はヤム芋耕作の成果を通してその力を誇り示すときでもある⑨。

ヤム芋はメラネシアの農作物の中では際だって人為的でそれゆえ労力を要する作物である。さらに、それはあらゆる精力と労力を注ぎ込んで作られた労作であるがゆえに、自然物と対立する典型的な「文化」として表象されているのかも知れない。こうした意味で、ヤム芋はメラネシア文化を最もよく象徴するメラネシア的農作物であると見る事が出来るように思われる。

注

- ① タロ芋は内陸の湿地ばかりではなく、溪谷沿いや乾いた平地などでも栽培されるが、こうした場合には灌漑水路によって水を循環させる。灌漑による水耕タロの栽培はニュー・カレドニア、ニュー・ベブリディーズ、ソロモン、フィジーなど広い範囲で行われている（Barrau 1956, 1958；橋本 1986 など）。
- ② メラネシアにおけるヤム栽培の季節性については、はたしてどこまでヤム芋の植物学的な性格に基づいているのか、多少の疑問を感じている。
- ③ メラネシアで一年の始まりを示す自然現象としては、すばる、オリオンのベルトの三つ星、シリウスなど星の位置、パロロと呼ばれる環形虫、飛び魚の出現などがあげられる。
- ④ マリノウスキーの民族誌の中に掲載されている写真は、長さがおよそ2メートル程度であり、その形状からもこのことを裏づけている。
- ⑤ ニュー・ベブリディーズ諸島のマレクラでもほとんど同じ様な例が報告されている（Layard 1942:6）。
- ⑥ 次に述べるニュー・ベブリディーズ諸島の例と異なり、ここでは「月」の名前はない。
- ⑦ Barrauは7月から12月に植え付け、3月から4月に収穫としているが、これは正確ではない（Barrau 1956:185-186）。
- ⑧ ヤム芋と男の身体との結び付きはヤム芋の起源神話にも現れる。すなわち、77種に分類される各種のヤム芋は、シニットという名の神話中の老人の切り刻まれた身体各部から生まれたとされている。また、長いヤムは男根と類比される。
- ⑨ 割礼からタルタブウェアンまでの隔離期間中、割礼を受けた本人、その両親、割礼執行者はヤム芋のみを食べる。また性交も禁止である。この禁忌を破ると割礼の傷が治らなかったり、ヤム芋が出来なかったりするとされる。
- ⑩ 絶望した女性は自殺に及ぶこともあるが、男性は自殺することはなく、代わりに自分の栽培したヤム芋を破壊してしまう。これは社会的な自殺を意味する。
- ⑪ 詳しくはふれないが、アベラム族でもほぼ同じ様な例が報告されている（Forge 1965）。

- ⑫ 豚の象徴的意味は主として量的な蓄積にあるが、ニュー・ヘブリディーズ諸島における豚の牙のように飼育者の作為の対象となりその能力と努力の結果を表すこともある。ニュー・ヘブリディーズ諸島では雄豚の下顎の牙を人為的に伸ばして豚の財貨としての価値を高めている。牙は丸く円環状に伸び、やがて二重三重の輪を形作るほどに価値が高まる。
- ⑬ イラヒタ・アラペッシュでは成女式の隔離が解けたときに、先端がふた又に分かれた小さなヤム芋、「女のヤム芋」が少女と同じ盛装を施されて展示される (Tuzin 1972:237)。
- ⑭ ヤム芋は月と結びつけられている。これはその霊が夜行性であることと関連しようが、ヤム芋が太陰暦と結びつけられていることをも予想させる (Fortune 1963)。
- ⑮ メラネシアにおける、権力と生命力との関連は別稿で論じた (石井 1988)。

文 献

Barrau, J.

1956 "L'agriculture vivrière indigène aux Nouvelles-Hébrides"
Journal de la société des océanistes vol. 12

1958 SUBSISTENCE AGRICULTURE IN MELANESIA
Bishop Museum Bulletin 219, Honolulu: Bishop Museum

Brookfield, D. C. & Doreen Hart

1971 MELANESIA: A geographical interpretation of an island World
London: Mathuen & Co. Ltd.

Deacon, A. B.

1934 MALEKULA: A vanishing people in the New Hebrides
London: George Routledge & Sons, LTD.

Firth, R.

1967 THE WORK OF THE GODS IN TIKOPIA
London School of Economics Monographs on Social
Anthropology Nos. 1&2, London: The Athlone Press

Forge, Anthony

1965 "Art and Environment in the Sepik"
Proceedings of Royal Anthropological Institute for 1965

Fortune, R. F.

1963 SORCERERS OF DOBU: The Social Anthropology of the Dobu
Islanders of the Western Pacific (Revised edition)
London: Routledge & Kegan Paul LTD.

橋本征治 (Hashimoto)

1986 「太平洋地域におけるタロイモ灌漑耕作 — フィジーを中心として」
関西大学『文学論集』創立百周年記念号

- Hocart, A. M.
 1929 LAU ISLANDS, FIJI
 Bishop Museum Bulletin 62, Honolulu : Bishop Museum
- 石井眞夫
 1988 「メラネシアにおける生命の民族誌」
 小川, 小松, 渡辺(編) 『象徴と権力 — 社会人類学の可能性』所収,
 東京: 弘文堂
- Jolly, M.
 1981 "People and their Products in South Pentecost"
 in M. Allen (ed) VANUATU: Politics, economics and
 ritual in island Melanesia
 Sydney : Academic Press
- Layard, J.
 1942 STONE MEN OF MALEKULA London : Chatto & Windus
- Kaberry, P. M.
 1941 "The Abelam Tribe, Sepik District, New Guinea"
 Oceania vol. 11
- Leach, E.
 1959 "Primitive Calendars" Oceania vol. 20
- Malinowski, B.
 1935 CORAL GARDENS AND THEIR MAGIC VOL. 1 & 2
 Bloomington : Indiana University Press
- 1981 『バロマートロブリアンド諸島の呪術と死霊信仰』(高橋渉 訳) 東京: 未来社
- Muller, Kal
 1975 "Agriculture and Food Preparation in Bunlap (New Hebrides)"
 Journal de la société des océanistes vol. 31
- Tuzin, D. F.
 1972 "Yam Symbolism in the Sepik : an interpretation account"
 Southwestern Journal of Anthropology vol. 28
- Whiting, J. W. M. & S. W. Reed
 1938 "Kwoma Culture : Report on field work in the mandated territory
 of New Guinea" Oceania vol. 9
- Williamson, M. H.
 1979 "Who Does What to the Sago ? : A Kwoma variation of Sepik
 River sex-roles" Oceania vol. 49